

# 特集

## 江戸時代に和歌山で見られた彗星

米澤 樹 (みさと天文台 / 和歌山大学観光学研究科)

### 1. はじめに

江戸時代に見られた彗星についての研究の多くは公的な記録について調査したものである[1,2]。そのため、一般市民が彗星に対してどのような反応を示していたのかは見えてこない。

和歌山には、嘉永2年(1849年)から明治16年(1883年)までの約34年間にわたって書かれた『小梅日記』が残されている[3]。本研究では、この日記から彗星に関する記述を探し、人々の反応を調査した。

### 2. 小梅日記について

『小梅日記』は、紀州藩校学習館の督学(学長)の妻である河合小梅(1804-1889)が書いた日記である。資料の散逸により一部が欠損しているものの、現在14冊が和歌山県立図書館に所蔵されている。

小梅は結婚して間もない16歳から亡くなる86歳まで約70年間にわたり、記録魔と呼ばれるほどこまごまと記録を残した[4]。その多くは来客や贈答のメモ、物品の値段などである。これらは、誰かに読まれることを想定した内容ではないと考えられるが[5]、日々の食生活や生活様式を知るための資料として参照されている[6,7]。

### 3. 調査手順

彗星の記録を見落とさないよう、まず江戸時代から明治にかけての大彗星のリストを作成した。リストの作成には、嘉永6年から文久2年に現われた彗星のリスト[1]とJPLウェブサイトの“Great Comets in History”[8]を参考にした。次に、大彗星が見られたと推定される時期に、『小梅日記』(文献[9])に該当する記載がないかを確認した。また、その他の箇所でも「ほうき星」という記述がないかを電子書籍版[10]を用いて検索を行った。

その結果、3つの彗星に関する記載が見つかった。

### 4. 記載されていた彗星

#### 4.1 クリンカーヒューズ彗星(C/1854 L1)

クリンカーヒューズ彗星はドイツの天文学者である Wilhelm Klinkerfues によって発見された彗星である[11]。日本でも京都で土御門家が、大阪で間家が観察している[2]。

小梅日記には嘉永6年7月22日(1853年8月26日)に以下の記述がある。

7月22日

廿二日 いつの比よりか知らね共、盆後より人々、ほうき星出るよし申合、夜前いぬるの方にあたり、如此の星色は至てうすく白色にみゆ。(中略) 此処一尺余りに一間計にみゆ。五つ過[12]にみたるに、もはやみへず。宵の間なり。

(文献[9] 1巻 pp.110-111)

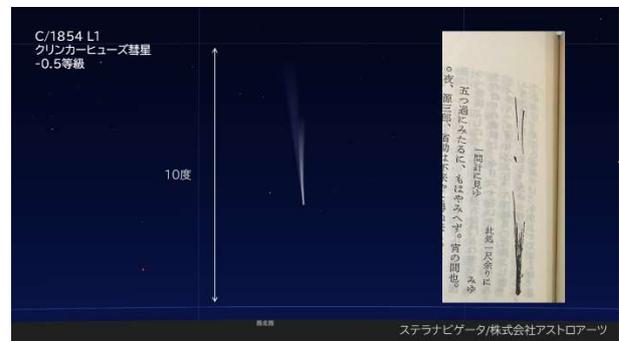


図1 クリンカーヒューズ彗星

ステラナビゲータ11で筆者作成(1853年8月26日20時00分)の図と文献[9](1巻 pp.111)に掲載されている絵。等級はステラナビゲータ11による。

#### 4.2 テバット彗星(C/1861 J1)

テバット彗星はオーストラリアの天文学者である John Tebbutt によって発見された彗星である[13]。

小梅日記には万延2年5月24日(1861年7月1日)と6月16日(7月23日)の2か所に以下の記述がある。

5月24日

廿四日の夜より、北よりたつみの方へ四五間ほどほうき星みゆ。宵よりいでる。此間甚兵へ殿申さるるは、私此間朝六つ比[14]起出てみしに、西へな引有之との事。ほう年星成杯言て悦ぶ者も稀には有。此ごろの下せつには、公方様を毒害し奉りたると言者も有。(中略)天子に御うらなひ有之処、先不宜、大地しんか大雨、いづれ御つつしみとの事よし。かるき者らはほう年星と唱へ、菓子うり杯ほう年踊りしてうりあるく。

(文献[9]1巻 pp.264)

6月16日

十六日(中略)先日此よりのほうき星段々と上へ来しが最早みへず。

(文献[9]1巻 pp.267)

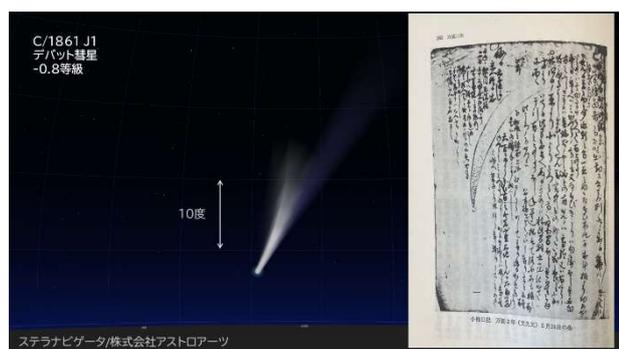


図2 テバット彗星

ステラナビゲータ 11 で筆者作成 (1861年7月1日 21時00分) の図と文献[9] (1巻 pp.265) に掲載されている絵。等級はステラナビゲータ 11 による。北から南東にまで突き抜けるような尾が描かれている (尾の向きはダストテイルとは反対である)。

#### 4.3 1882年の大彗星 (C/1882 R1)

1882年の大彗星は9月に突然現れた彗星で[15]、小梅日記には明治15年10月8日(1882年10月8日)に以下の記述がある。

10月8日

八日 日よう。大に快晴。けさがた東の方を見れば、ほうき星誠にあざやか也。

如此凡二間半位にみゆ。此年迄かように近くあざやか也は始也。皆ほう年星也との沙た。

(文献[9]3巻 pp.251)



図3 1882年の大彗星

ステラナビゲータ 11 で筆者作成 (1882年10月8日4時00分) の図と文献[9] (3巻 pp.251) に掲載されている絵。等級はステラナビゲータ 11 による。彗星の左上に絵とほぼ同形の月がある。

#### 5. 彗星に対する人々の反応

これらの記述からは明るい彗星が見られるたびに彗星が世間で話題になっていることがわかる。

3つの彗星のうちテバット彗星に関する記述のみ、「ほう年星」という肯定的な呼称だけでなく、「毒害」や「大じしんや大雨」といった否定的な噂が見られた。安政大地震がテバット彗星から4年前の安政2年(1857年)、コレラ流行が2年前の安政6年(1859年)であり、災害が続いた時期の後であるが、小梅日記にはそれらの災害に触れた記述はみられない。

クリンカーヒューズ彗星については、前後に大きな天災は起こっていない。歴史的な出来事としては、ペリー来航がその年の6月1日にあり、小梅日記でも6月17日に触れている。この大事件とクリンカーヒューズ彗星を結びつけるような記述はない。

1882年の大彗星については、明治期の激動の時代ではあるものの、日記には「ほう年星」との肯定的な記述しかない。

以上のことから、和歌山では、夜空を横断するほど大きく見えるテバット彗星の到来そのものが衝撃的であったことから、時代背景に関係なく否定的な噂が流れた可能性がある。

#### 6. まとめ

和歌山に残る江戸時代～明治期の日記から彗星に関する記述を探したところ、3つの彗星についての記述を発見した。そのうち、テバット彗星については否定的な噂が記録され

ているが、ほかの2つの彗星は肯定的な記述のみであった。

結びに代えて、本研究の限界と課題を提示する。

第一に、和歌山という地域の特殊性が影響を及ぼした可能性が考えられる。当時の和歌山は紀州徳川家が治める藩であったため、他の地域よりも噂や情報が早く広まった可能性がある。他の地域の類似した日記や資料との比較が今後の研究課題である。

第二に、観察された彗星の見かけの大きさを正確に推定できない点が課題として挙げられる。河合小梅の絵から彗星の形状を確認することはできるが、他の星などが描かれていないため、その見かけの大きさを正確に推定することは難しい。加えて、観察環境や日記の記し方が記録の正確性に及ぼす影響についても検討が必要である。

第三に、河合小梅によるテバット彗星の絵と、ステラナビゲータ11で再現した図(図2)とで尾の向きが異なる。この要因については、本研究では十分な説明ができなかったため、今後の課題とする。

以上の課題はあるものの、『小梅日記』は和歌山の人々が彗星にどのように反応したかを記録した、貴重な一次資料である。他の地域の彗星記録と比較することで、彗星に対する人々の反応をより詳細に明らかにすることができるだろう。

## 文献

- [1] 大蔵満(2013)「安政5年に現われた大彗星 ～ドナチ彗星の記録～」, 長野市博物館博物館だより, No. 86, 1: 2.
- [2] 玉澤春史・岩橋清美・北井礼三郎(2023)「嘉永六年クリンカーヒューズ彗星にみる土御門家・間家の観測精度比較」, *Stars Galaxies*, vol. 6, id. 9.
- [3] 和歌山県立図書館(n.d)「小梅日記 | デジタルアーカイブ」,  
<https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/digitalarchive/cat82/>

[4] 円地文子(1977)『日記につづる哀歓』, 集英社.

[5] 鈴木貞美(2016)『日記で読む日本文化史』平凡社新書, 平凡社.

[6] 松下幸子(1987)「卵料理考」, 調理科学, vol. 20, No. 4, 319: 324.

[7] 渡辺光雄・高阪謙次・藤城栄一・筒井義富・江口敦子・馬路泰蔵(1982)「生活様式の研究」, 住宅建築研究所報, vol. 8, 337: 382.

[8] Donald K. Yeomans (2007) 'Great Comets in History', Jet Propulsion Laboratory (JPL).

[https://ssd.jpl.nasa.gov/sb/great\\_comets.html](https://ssd.jpl.nasa.gov/sb/great_comets.html)

[9] 川合小梅 (2007)『小梅日記：幕末・明治を紀州に生きる』(志賀裕春・村田静子 校訂) ワイド版東洋文庫. 平凡社.

[10] 川合小梅 (2007)「小梅日記 幕末・明治を紀州に生きる」(志賀裕春・村田静子 校訂), JapanKnowledge.

<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=80010V0256P0001>

[11] M. Klinkerfues(1853) 'Discovery of a New Comet', *Monthly Notices of the Royal Astronomical Society*, Vol.13, 239: 240.

[12] 午後8時ごろ

[13] G. W. Kronk (2003) 'C/1861 J1 (Great Comet of 1861)', *Cometography*.

<https://cometography.com/lcomets/1861j1.html>

[14] 午前6時ごろ

[15] G. W. Kronk (2003) 'C/1882 R1 (Great September Comet)', *Cometography*.

<https://cometography.com/lcomets/1882r1.html>



米澤 樹